「漢語をかな書きしても用は足りる」と、かな文字論者は、言います。「学校」という字形は、「がっこう」よりも、その意義、内容をよく表現すると言うが、それは、漢字本来の性格にあるものでは決してない。まったく慣れによるものである。なぜなら「学校」の「校」の本義は、「首かせ」「足かせ」なのである。「校」の字が、何かしら、学校の建物を想像させる文字であるかのように思わせて来たものは、実はまったく過去の習慣によるものであって、それは、「校」の本義を見れば明瞭である。表記の問題は、慣れであり、ゲシュタルトの問題に過ぎないとも。

「表記の効果は、習慣による」という意見については私も賛成です。しかし、すべてが習慣によるものであるかどうか、それ以外には効果を及ぼす要素はないか、これはよく考えてみる必要のあることです。また、すべてが習慣によるとしても、「だから、漢語を漢字で書こうが、かなで書こうが、効果は同じだ」という考え方には、現実を無視した論議の飛躍があります。漢字とかなを同じ線の上に並べた場合に同じ効果が考えられる、というのですが、漢字には、「慣れ」がすでに完成されているのに対して、かなでは、その「慣れ」をこれから作って行こうとしているのに過ぎないのです。漢字は、日本において、少なくとも千年以上にわたって使用されて来ていて、しかも現になお使用されているものなのです。ところが、かなには現実には何の実績もないのです。だから、本当に表記の効果が習慣によるものと信じているならば、千年にわたる習慣の価値を認め、漢字で書く習慣を尊重し、将来

も、この表記の仕方を守り続けて行こうと考えるのが本当だと思います。「文字の効果は習慣による」と主張する者が、現実の習慣(漢字を使用しているという現実の習慣)を無視するのは、明らかに矛盾と言わなければなりません。

だから、「漢字の使利さは、過去の長い習慣が作ったものである。だから、かなも漢字と同じくらい長く使われるならば、漢字と同じくらい使いよくなる道理である」という仮定論であって、現実的には適用されるものではないと考えるべきです。遠い将来の、それも単に可能性を認める主張に過ぎないのです。勿論、かなを用いて千年の将来に、漢字と同じ効果を発揮する保証は何もありません。

たとい一部の人であるにもせよ、遠い将来の「かな文字表記」の効果の可能性を、百パーセント信頼して、千数百年もの間使い慣れて来た漢字を棄てようとする人がいるのは、私には不思議でなりません。私たちは、どんなに甘い言葉で誘われようと、少なくとも父母の代から長い歴史を持つ「学校」という表記を棄てて、これから、一生の間、「がっこう」という能率の悪い表記をがまんして使うほど、お人好しであってはならないと思います。

現在の表記法は、現在に生きる私たちのために、私たちの使用するものなのです。私たちは、しかし、過去の人たちとも語れなくてはなりません。私たちの先祖の文化遺産は、誰の手を借りることもなく、自分の手で受け継ぎたいものです。またアナトール・フランスが語って

いるように、「私たちの祖先の感情が脈打っている言葉だけが、私たちの思想を盛ることができる」のです。先祖の言葉が、最も自分に近い言葉なのです。そして、よく考えなければならないことは「私たちがこう考えていることは、私たちの子孫もそう考えるに違いたい」ことなのです。こうして、言葉も文字も、今まで大した変化をしないで伝えられて来たのです。だから、「私たちは不便を感じず、将来のために、子どもたちのために不便をがまんしよう」と言うのは、言葉や文字に関するかぎり、誤っていると言わなければなりません。

しかし、革新論者というものは、常にこう言うものです。「われわれは、子供たちの幸福のためには、喜んで犠牲になろうではないか」と。私たちは、「将来のために」「子供たちのために」という声には大変弱いものです。少々疑問に思う点はあっても、その声にはすぐ順応してしまいます。誠に、それは現代における「錦の御旗」です。これには抵抗しようがありません。革新論者はそれをよく心得ています。

××主義というものをふりかざす革新論者は、破壊を好み、犠牲を決していといません。だからこれは大変わが国の大衆の同情を得やすいものを持っています。しかし、真の進歩は、犠牲を一般大衆に強制するようなものではありません。犠牲を伴う、目ざましい変化は、決して国民大衆の幸福に結びつくものではありません。もっと平凡な、言わば「お茶づはの味」が私たちにふさわしいものです。しかし、何としてもわが国では、保守の道は、革新派に比べて大変不利です。け

れども、いたずらに夢を将来に、子供に託して、現在を否定するようなスローガンに惑わされることなく、現在の自身の幸福を追求することそのことの中に、子供たちの幸福も、希望も明るい将来もめるのだということを感じて、強く、自己を主張すべきだと思います。

初めにもどります。かな文字論者の指摘する通り、字典によれば、「校」の第一義は「かせ」とあります。しかし、私たちは、ここ数百年にわたる文献から、「かせ」の用法をいくらでも見つけることができます。それは、あまりにもはるかな、遠い、忘れられた昔のことなのです。それに反して、「学校」の用法は、現在に及ぶ百年の「学校」の歴史と共に、今までを長く生き続けて来たものなのです。「学校」の文字が「校」の本義(かせ)などに関係なく、学校のイメージを持っているというのは、誠に故あるかなと言うべきであって、まったく、その文字の持つ歴史の力に外ならないと思います。

くり返して言いたいと思います。「漢字の便利さは、過去の習慣から作ったものだ」と言うかな文字論者の言葉は、私も一部同感します。しかし、私は、「だから、千余年にわたる過去のすばらしい習慣の力を背景に持つ便利さを、いつまでも失わずに、大切に保存し、後代に伝えたい」と思います。